

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：35307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17459

研究課題名(和文)フロー理論に基づいたヴァイオリン集団学習の実践的研究

研究課題名(英文)Developing a Flow-Theory Based Group Violin Instruction

研究代表者

安久津 太一(Akutsu, Taichi)

就実大学・教育学部・講師

研究者番号：00758815

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文):フロー理論は、社会心理学者チクセントミハイが、人が現在の瞬間に夢中になって没頭している経験を分析し体系化した理論である。本研究はコロンビア大学教育学部のカストデロが開発した「音楽活動のフロー観察法」(Flow Indicators in Musical Activity)を援用し、ヴァイオリン学習者一人一人がヴァイオリンや教材、他学習者、指導者と相互に関わり合う中で経験するフローを観察、分析し、知見を反映させて、ヴァイオリン集団学習の実践を開発した。

研究成果の概要(英文):Csikszentmihalyi's Flow Theory represents an optimal psychological state that people experience when engaged in an activity that is both appropriately challenging to one's skill level. Present study, by employing Custodero's Flow Indicators in Musical Activities, narratively analyzed flow experience in children's violin playing and learning to design and construct an alternative approach of group violin instruction.

研究分野：音楽教育学

キーワード：フロー理論 ヴァイオリン 器楽教育 ナラティブ フロー観察法

1. 研究開始当初の背景

フロー理論は、社会心理学者チクセントミハイが、人が現在の瞬間に夢中になって没頭している経験を分析し体系化した理論である。1989年にはコロンビア大学教育学部のカストデロが「音楽活動のフロー観察法」(Flow Indicators in Musical Activity)を開発し、その後2005年には質的研究として乳幼児・児童のフロー観察が発表された。

チクセントミハイ(1990)は、子どもにヴァイオリン教育を授けさせる保護者の多くは「早くうまくなってほしい」という思いが先行し、子どもがどのような音楽学習経験をしているかという問題への関心が薄くなると批判している(p.141)。

関連して、高橋(2012)も、音楽の技能を教えることと、子どもが音楽の楽しさを享受することの関係は時として矛盾することを指摘している。この問題を解決するために高橋は、チクセントミハイのフロー理論に基づいて、学習者が経験する挑戦と子どもの技量の適度なバランスをとることを提唱した。この適度なバランスによって楽しさを喚起し、より高度な技能の獲得に繋がるのである(高橋, 2012)。

しかしながら、ヴァイオリンには、習得が難しいイメージが固定観念として定着しており、学ぶ楽しさとヴァイオリン学習が乖離していることが課題としてあげられた。

また上記フロー観察を実践的に研究し、ヴァイオリン指導に応用されることは実現していなかった。また、フロー観察法が幼児のヴァイオリンとの関わりや遊びの中で展開される研究は過去に例がなかった。

そこで、本研究では、フロー理論をベースにしたヴァイオリン学習をテーマとして定めた。

あわせてフロー理論が音楽教育の実践の質向上にいかに関与できるか、その可能性と意義についても検討を加えることとした。

2. 研究の目的

社会心理学者チクセントミハイのフロー理論に基づいた、ヴァイオリン学習の実践を開発することを本研究の目的とする。当該研究者は、これまでにコロンビア大学カストデロ(Custodero, 1998, 2005)が開発した「音楽活動のフロー観察法」(Flow Indicators in Musical Activity)を援用して、日米両国において、幼児、児童のヴァイオリン学習場面のフロー観察に取り組んで来た(Akutsu, Gordon & Noguchi, 2013)。観察から得られた知見を反映させて、世界に先駆けてフロー理論の音楽教育分野への応用を見据え、フロー理論に基づいたヴァイオリン学習の実践を開発することを旨とした。

3. 研究の方法

本研究はコロンビア大学教育学部のカストデロが開発した「音楽活動のフロー観察

法」(Flow Indicators in Musical Activity)を援用し、ヴァイオリン学習者一人一人がヴァイオリンや教材、他学習者、指導者と相互に関わり合う中で経験するフローを観察、分析し、知見を反映させて、ヴァイオリン集団学習の実践を開発した。

観察指標は、それぞれ課題の自己設定、修正、慎重なジェスチャー、挑戦の予期、発展、延長、他者の存在の認識である。いかにそれぞれの指標の定義と例を示す。

課題の自己設定：

子どもが自ら目標や活動を設定している。

(例)教師が準備をしている間に、子どもが自ら指を弦に乗せて、音階を弾いている。

課題の自己修正：

子どもが自ら誤りに気がつき改善している。

(例)子どもが自ら弦を押さえる指の位置を調整している。

慎重なジェスチャー：

集中してコントロールされている、無駄の無い所作。

(例)子どもは非常にゆっくりと全ての指を一本一本順番に、指板上の弦に並べている。

活動の予期：

次の活動を予測したり準備したりしている状況。

(例)次の活動に移る際に、子どもが自ら演奏の正しい姿勢を事前に準備している。

活動の発展：

現在の活動をさらに難しく変化させている状況。

(例)習得したリズムのパターンに、子どもが自ら斬新なリズムを加えている。

活動の延長：

活動終了の指示の後も、なお活動に従事している。

(例)セッションが終わった後もなお、ヴァイオリンを弾き続けている。

他者の存在の意識：

他者を凝視したり顔をそちらに向けたり等の行動や、身体の動きの同調も含め、言語的・非言語的問わず人と人の関わり合いが確認される言動。

(例)音楽に合わせて動いている際に、子どもが周囲の子どもの真似をして動きを変えている。

データの収集に関しては、カストデロの先行研究を踏襲し、イベントサンプリング法によるビデオ観察を行い、研究協力校及び施設のスタッフや研究協力者がビデオ集録を行う。同時に、筆者自身も実践をしながら記録を行った。

また、スタッフや筆者によるフィールドの記録を継続し、必要に応じて対話型のインタビューを複数回実施した。

最終的に、ナラティブを構成し、幼児、児童、生徒がヴァイオリンとの関わり合いの中で経験するフローを、体系的に分析し、実践開発を行った。

本論は、実践的な事例研究としての位置づけを明確化し、ナラティブ研究の方法を採用して研究を進めることとした。

藤原(2007)は教育実践におけるナラティブ研究を、語り手と聴き手の相互行為により生み出される「経験の物語」と説明している。

音楽教育学の分野ではBarrett(2009)が、ナラティブ研究を単に言語的な語りを超える、音楽や芸術活動を通じてこそ「語られる」事象に意味付けする作業であると述べ、ナラティブ研究へのスタンスを拡張している。

本研究は特にフロー観察法をナラティブに援用し、より客観的な評価につとめた。

4. 研究成果

インパクトファクターを有する国際誌2編、査読ありの国内誌1編をはじめ、国内外での実践のデモンストレーションや学会発表で大きな成果をあげることができた。

Custoderoの先行研究では、スズキメソッドの集団授業下で、教師による教示や集団活動が無い場面、例えば教師が楽器を調弦して準備している場面に限定して課題の自己設定が観察されていた。本研究においては、遊びを通じた学びの場面で課題の自己設定が頻繁に観察されていた。

先行研究同様、教示の時間にはフローは観察されなかった一方で、合奏場面においては課題の自己設定が顕著であった。

特に2歳児の観察においては、課題の自己設定及び修正、活動の発展や延長、さらに他社の存在の意識が顕著であった。

一方で慎重なジェスチャーに関しては、本事例では観察されなかった。本事例では音楽に合わせて全身でリズムを感じながら開放弦を鳴らし、いわばヴァイオリンを、みたくて遊びのツールとしていたことに起因すると考えられる。幼児の発達をふまえて、特定の技能をいつどの段階で教えるか、あるいは子どもが自発的に学ぶか、フロー観察が有効な手だてを示すと考えられる。

また、本研究では、挑戦の予期も観察されなかったが、スズキメソッドの教師主導の集団活動と大きく異なり、教師主導の集団活動が無かったため、次の活動を予測する場面が少なかったことに起因すると考えられる。

本論が扱うワークショップ型の学びや遊びの中で観察される事例では、子どもがいかに音楽や楽器と関わって、主体的に音楽活動に参加するか、より多様な場面の観察を可能とした。したがって、Custoderoの研究が扱った従来型の集団教授下で観察されるフローとは異なる多様なフローが、事例として集積された。

特に2歳児に照準を当てた観察はMusic Education researchに、4歳児を対象とした研究は「音楽教育実践ジャーナル」にそれぞれ掲載された。

本研究の副次的な成果として、中学生を対象としたヴァイオリン授業の「ファストプロトコール」開発があげられる。具体的には、フロー理論をベースにしたヴァイオリン指導の「早期プロトコール」の開発プロセスを検証した。

日本の音楽の授業でヴァイオリンを扱うことが稀であることに加え、音楽の授業時間数自体が非常に少ないことから、ヴァイオリニストである筆者が、中学校の音楽教師と共に、3回のみ授業で、生徒がヴァイオリン演奏を経験し、アンサンブル活動に参加できる、プロトコールを開発した。

主な授業の内容は以下の通りである。

1回目：

開放弦を弾くこと。フロー理論に基づいた幼児の音の探求を、器楽授業に応用することに成功した。

2回目：

移弦により音程を変えること。この段階でアンサンブルの経験をすることで興味関心や意欲の喚起に加え、学びに向かう力を実践的に育むことができた。

3回目：

運指により音程を変えることを習得した。曲の一部分を習得してすぐにアンサンブルに参加できることで、音楽を愛好する心情の育成に貢献できた。

データの収集には、ビデオ観察とフィールドノートの記述、さらに120人の生徒によるコメント用い、コード化を経て、最終的にナラティブを構成した。研究を通して、ヴァイオリン学習のレディネスや生徒一人一人が経験するチャレンジ、楽しさや満足感が明らかになった。

これらの成果はInternational Journal of Music Educationに掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Akutsu, T. (2018). Observable flow experience in a two-year-old Japanese child's violin playing. *Music Education Research*. Volume 20-1, pp. 126-140.

Akutsu, T. (2018). Constructing a fast protocol for middle school beginner violin classes in Japan. *International Journal of Music Education*. Vol 36-1. pp.96-107

安久津太一(2016).「子ども一人一人の学びを保障するツールとしてのフロー観察」『音楽教育実践ジャーナル』14(0), pp.6-14

〔学会発表〕(計5件)

Sutani, S. & Akutsu, T. (2017). A case study of flow experience in mixed instrumental ensemble practice in Japanese middle schools. *Jaapan-US Teacher Education Consortium*. University of Hawaii.

Akutsu, T. (2017). A demonstrative workshop of the 'fast protocol' for beginner violin classes in Japan. *Asian Pacific Symposium for Music Education Research*. Melaka, Malaysia.

安久津太一(2017)「中学生を対象とした弦楽器教育の早期プロトコール」日本音楽教育学会中四国例会

壽谷静香・安久津太一(2016)「フロー理論に基づいた音楽教育の実践的研究-FIMAを用いた幼児のヴァイオリン学習の観察」日本教育心理学会第58回総会

Akutsu, T. (2016). Contrasting Methods and Approaches in Music Education: A Demonstrative Workshop of Dalcroze and Suzuki in Practice. *The 60th International Conference of Korean Music Education Society*

〔図書〕(計1件)

Implementing the mixed instrumental ensemble practice by applying Instructional Template (IT) and flow assessment in Japanese music education. In R. K. Gordon, T. Akutsu, J.C. McDermott, J. W. Lalas. (Eds.). *Challenges Associated with Cross-Cultural and At-Risk Student Engagement*. IGI Global. pp.188-212.

6. 研究組織

研究代表者

安久津 太一 (Akutsu, Taichi)

就実大学・教育学部・講師

研究者番号：00758815